

2021. 6. 27. 主日礼拝説教  
聖書：ヨハネによる福音書12章20-26節  
『一粒の麦とならずば』

こんなお話があります。昔、あるおばあさんが、じぶんはどうも年をとって役に立たないし、人に迷惑ばかりかけているので、もうこれ以上長生きしたくないと思い、神さまに自分の命を断って下さいとお祈りに行きました。その帰り道、すっかり遅くなってしまつて真っ暗な夜道を急いでいると鬼が出てきておばあさんを食い殺そうとしました。するとおばあさんは、「命ばかりはお助けを一！」と叫んだそうです。死なせて欲しいと願っていてもイザとなると命が惜しくなる、これがわたしたち人間の姿なのです。

わたしたちは、結構自分では無欲な人間だと思つてはいても、ずいぶんいろんな欲望を捨てきれないで生きているものです。生存・食欲・自己主張・名声・成功・権力欲など枚挙に暇がありません。誰だって人として生まれた限りは長生きをしたいし、健康でもありたい。良い学校、良い仕事、良い家庭を持ちたいし、みんなが認めてくれる立派な人になりたいものでしょう。しかし、このような立派な自分を打ち立てている間は、立派になれなくて苦しんでいる人の思いはどうてい理解出来ないのではないのでしょうか。大きく失敗して地に落ちて初めて同じ気持ちになれる友が生まれるのです。

本日の聖書の箇所には、主イエスのところにギリシア人が面会に来るという話から始まります。当時の世界観で言えばギリシアというと「世界」そのものの拡がりの意味していました。いよいよユダヤというちっぽけな枠組から広大な世界へと踏み出すような勢いかと思いきや、主イエスは「一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが死ねば多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者はそれを失うが、この世で自分の命を憎む人はそれを保つて永遠の命に至る」と言われました。命あるものは人間であれ麦の種であれ自分の命を守りたい。それなのに地に落ちて死ななければならぬと言われたのです。立派でもないただの一粒の麦となれと言われるのです。そうなるためには自分の命を憎むと表現しなければならぬほどの葛藤が必要でした。それがゲッセマネの祈りであつたらうと思います。

ヘルマン・ホイヴェルスの「最上のわざ」という詩があります。  
「老いの重荷は神の賜物。古びた心にこれで最後の磨きをかける。まことの故郷へ行くために。己をこの世に繋ぐ鎖を少しずつ外してゆくのは真にえらい仕事。こうして何も出来なくなればそれを謙遜に承諾するのだ。神は最後に一番良い仕事を残して下さる。」

老いることは神の恵みです。どんな強い人、偉い人もみんな老いてただの人になってゆく。とてもじゃないけど自分の命を憎むほど、自分を捨てることなど出来なかったわたしたちから、知らない間に少しずつ能力や肩書きや欲望を取り去って、神の前にただのひとりの人間にして下さる……。そういうことだと思ふのです。

わたしたちは特別な立派な麦になることが求められているのではないのです。ただの一粒の麦、地に落ちた一粒の麦になることが求められているのです。神の前に真に偉大なこと栄光あることとは、ひとから賞賛を浴びることではなく、地に落ちる経験を通して人の痛みを知り、共に生きる仲間を生み出してゆくことではないでしょうか。老いて最後にこのことが残る、これこそ神の恵みなのでしょう。